Special Essay

糖尿病と絵本―『食』を巡って」

腎臓内科講座
玉置　清志

私の専門は腎臓病である。糖尿病が増える昨今、糖尿病性腎症も増加している。そのため、この患者さんに接し、またこの病気のディテールを講義・講演する機会が増えてきた。この病気をめぐって患者さん、看護師さん、あるいは栄養士さんたちと話すたびに「食育」という熟語に対する私のイメージが具体化していくことに妙な違和感を覚えた。

そもそも「食育」とは何か？

人間の本能であるはずの「食べる」ことをなぜ「教え」「学び」そして「育む」必要が生じたのか。岸田秀[1)]が指摘したようにヒトは「本能が壊れた」動物であり、その結果として「食べる」という基本習慣すら「学習」しなければならなくなったのだろうか？　「食育」を巡るさまざまな言説が文明の進歩の中で活発化していくことに索漠たる風景を思い描くのは私一人ではないだろう。

「食育」の必要性にいち早く気づいていたのは、服部幸應や三國清三といった有名な料理人たちであったという[2)]。これは私には随分意外だった。この10年余の「食」のエンターテイメント化に貢献しているとばかり思っていた、この優秀なシェフたちは、実は「食べる」行為が「壊れてきた」と随分前から感じていたのだ。危機感を抱いた服部氏らが政府に「食育」教育を具申したという。

「食育」に限らず、この10年で「食」に関する言葉が増えた。「個食」「中食」に加え「デパ地下」や「〇〇スタジアム」も食と結びつく。しかし幸い「家族みんなで食べる」行為を表す言葉は現われないし、現われてほしくはない。「家族みんなで食べる」には本来、その行為自体が内包する暗黙の了解があるから「言葉は要らない」のが平常であろう。

個人的なことだが、私と家内の実家では「すき焼き」の作り方が若干（しかし大きく）異なり、その結果、わが家の食卓には思わぬ「文明の衝突」が出現する。これはしかし、新たな「家族」を形作る副作用と考えるのが妥当であろう。問題は、その副作用を厭わず、「みんなで食べる」ことであり、この繰り返しが「個食」「中食」さらには「食育」なる言葉を不必要なものにしてくれると信じているが、いかがであろうか。

「ぐりとぐら」は子供が大好きな絵本だ。野ねずみのぐりとぐらがホットケーキを作って森の仲間たちみんなとごちそうにあずかるという話だが、私自身読んでいて、ついついホッとする。絵本や童話には「食べる」ことに関するものが多い。「食べる」意味をそっと教えているのだ。「食育」という言葉が広まるずっと以前から。

参考　１．岸田秀　「ものぐさ精神分析」（中央公論）
２．鷲田清一「食は病んでいるか」（ウェッジ選書）